

東日本大震災

被災地支援



3月11日に発生した東日本大震災。地震だけでなく巨大な津波が起こり一瞬にして尊い命と財産、人々の生活を奪い去りました。津波の後に残されたのは、がれきの山。被災地の人々は4カ月を過ぎた今なお過酷な状況の中で生活しています。

今、わたしたちにとって何ができるのか。多くの義援金が集まり、人的支援活動も行われています。その中で、県派遣団の一員として活動を行った町職員のうち、2名の活動状況を紹介します。

私たちが、熊本県派遣職員13陣20名は、6月4日から15日迄、宮城県東松島市役所に行行政機能支援に行ってきました。

むらしま たつあき
村嶋 立章 さん
(役場 税務課)

- 熊本県派遣職員第13陣
- 派遣地域 宮城県東松島市
- 派遣期間 6月4日～15日



▲東松島市のようす

東松島市の中でも、特に被害が大きかった地区に、大曲地区・野蒜地区・成瀬地区の沿岸部でマグニチュード8の地震と10級級の津波の同時発生により、全壊した家屋のがれき、水没した車、打ち上げられたままの船が散乱しており壊滅的状况に言葉を失いました。

今回の派遣事業で私が任された業務は、生活再建支援金の申請受付業務です。申請は、4月20日から始まっており、多い日は1日500人以上の方々が申請にいられた時期もあり、現在も1日平均60人が申請手続きにいられました。

この業務に携わって一番感じた事は、被災された方々に直接聞き取りをしなければならなかったため多くの方々に震災当時の状況や現在の生活

状況を聞く事ができました。その中で特に、震災から3ヶ月にもなるうとしているのに未だに現金がまったく入ってこないで困っていますと言う方々がたくさんおられて驚きました。

家が壊れ、車が水没し、収入源でもある船が壊れ、仕事を失った人達にも、弔慰金も義援金も見舞金も一切支給されていない現実には虚しさややるせない気持ちで一杯になりました。

この生活再建支援金も、申請されてから現金が振り込まれるまでに2ヶ月以上要します。

復興の早期実現を目指すのであれば、早急な対応を願うばかりです。

東日本大震災から3ヶ月以上経過しましたが、もう既に復興に向けて新たな一歩を踏み出された方もいますが、一方では家族を失った悲しみ、生き残った罪悪感等で前を向けない苦しさや闘っている方もたくさんおられ被災者の心のケアが置き去りにされているのを感じました。

また、私は支援活動期間中、昼休みに市役所の掲示板に貼られている全国から寄せられた激励の手紙、応援メッセージ、保育園児が書いた寄せ書きを毎日読みました。その時ほど、支え合うことの素晴らしさを感じたことはありませんでした。

今回の震災によりたくさんさんの尊い命が犠牲になりました。また、劣悪化する避難所生活を余儀なくされ不自由な生活を強いられている人達がたくさんいることを知りました。

今回の支援活動を通じて、生かされている命に感謝すると共に普通の日常生活が送れている自分がどれ程、恵まれているか改めて思い知らされました。

今後は、この経験を生かして本町の住民の安心安全を守るため防災意識の向上に努めると共に、東松島市はもとより一緒に支援活動に従事した市町村職員とのネットワークの構築や情報交換など率先してやって行きたいと思います。

東松島市の阿部市長は、支援活動最後の日に御礼の言葉を述べられ、その中で熊本の皆様には私を始め東松島市民も感謝の気持ちで一杯です。熊本の皆様のご好意に答えるためにも、必ず近い将来復興しますと挨拶されました。

町民の皆様におかれましては、今後とも被災地に対してのご支援・ご協力を引き続きお願い致します。

最後に、頑張ってきてくださいとあたたかく送り出していた草村町長を始め税務課職員並びに本町職員に心から御礼を申し上げます。



く どう あさ み
工 藤 麻 美 さん
(役場 住民福祉課)

- 熊本県保健医療チーム
- 派遣地域 宮城県南三陸町
- 派遣期間 7月1日～8日

今回、東日本大震災に伴う被災地支援として、熊本県の災害派遣保健医療チームの一員として、第18陣に参加しました。派遣先は、宮城県の南三陸町(人口約18,000人)で、7月1日から7月8日までの7泊8日間でした。震災により、沿岸部にあったほとんどの建物が全壊しており、壊滅的な被害を受けた地域です。私が参加した18陣の構成メンバー

は、保健師4名、栄養士1名、事務職2名の計7名のチームでした。

熊本県チームの活動拠点は、ホテル観洋という2次避難所でした。活動内容としては、要援護者や生活不活発病者(動かない状態が続くことにより、心身の機能が低下して、動けなくなる)の家庭訪問や保健指導、ホテル観洋内での健康相談の実施、「お茶っこ会(生活不活発病の予防の場)」の活動支援、仮設住宅への移行支援等でした。

避難所のライフラインは徐々に整いつつあるも、被災地は依然として大量の瓦礫が残っており、災害の甚大さを実感しました。実際、被災地を自分の目で見て歩き、空気感等を感じると、なんとも言えない複雑な気持ちになりました。

また、被災者の方の話を伺うと、「生まれ育ったこの土地が好きだけど、海が怖くなった」「自分は生き残ったけど、死んだ方が楽でよかったのじゃないかと思う」等、悲観的な言葉も聞かれ、被災地の復興支援とともに、被災者の心のケアも重要課題だと感じました。

しかし、このような大災害の中でも、私達派遣チームに「お疲れ様」「ありがとう」と声をかけられたり、前を向いて歩こうという姿勢や

お互いを思いやる姿が見えて、人の強さや優しさを実感しました。

被災地の支援は、私の想像以上に大変な状況でしたが、同じチームの人や南三陸町の住民、関わった多くの方々の言葉に支えられ、派遣活動を行なうことができました。また、今回の災害派遣に参加するにあたって、支援・協力していただいた同僚や上司、家族にとっても感謝しています。

そして、被災地の復興と被災者の方が笑顔で過ごせる日が、一日も早く迎えられるように心から願います。



▲南三陸町のようす